

かさねの色目 — 1000 年前の配色図鑑

「日本の色彩」第 3 回は、1000 年前の日本の服装と配色についてのお話です。1000 年前の日本は平安時代で、京都にいた「貴族」とよばれる人々が、文化の担い手でもありました。貴族は、天皇に連なる特定の家系の人々で、この人たちが日本の政治を行っていました。貴族が担った文化には、たとえば「源氏物語」のような文学が有名です。一方、服装に関してもファッション文化といえるものが生まれ、「色を組み合わせる」こと、つまり「配色」が行われました。季節や場面に応じたさまざまな配色が考案されて、それらが「かさねの色目」として今に伝えられています。これは、世界で初めての「配色図鑑」ではないか、とも言われています。今日の講義では、まず日本の伝統服装について簡単に説明し、「かさねの色目」について、例を紹介しながら説明します。

日本の被服材料と衣装

みなさんは、反物（たんもの）という言葉をご存じでしょうか。図 1 のイラストは、着物を売る店である「呉服店」を表しています。着物姿の女性が持っている、数十センチ幅の帯状の布を巻いたものが「反物」で、それを職人が切って縫い合わせ、着物を作ります。

ところで、反物の幅は、なぜ数十センチ程度なのでしょう。それは、平面状の布を作る「機織り（製織）」の工程に理由があります。

機織りの工程では、まず、縦方向の糸（経糸（たていと））を平行に並べておき、そこへ経糸に直交する方向の糸（緯糸（よこいと））を通して、平面状の布を作ります。図 2 は簡単な機織り機（織機）で、写真の縦方向に経糸が並んでおり、そこに手で緯糸を往復させて通して、布を織っていきます。写真の下側に、布ができてきています。

日本では、作業者の身体の前に経糸を並べ、両手の間で緯糸を通す形式の織機で布が作られていました。これは、緯糸を「飛ばす」機構が発明されてそれにより動力織機が実現されるまで続きました。その結果、反物の幅は、緯糸を通す手の届く幅に限られていたのです。

さて、このような帯状の反物を使って着物を作るのに考えられたのが、「直線裁ち」という技法です。これは、着物を構成する各部分を、ほぼすべて直線で構成し、直交する直線を多用することで、反物の



図 1: 呉服屋と反物 [1].

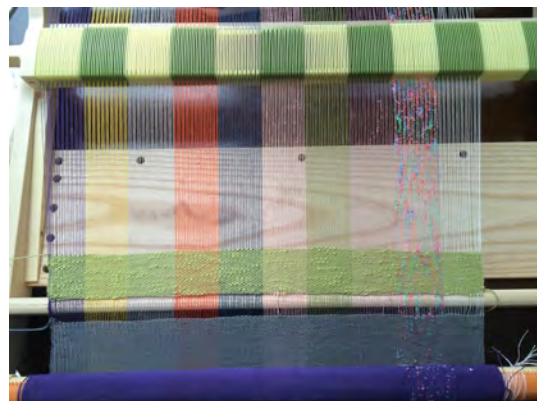


図 2: 布を織る.



図 3: 五衣唐衣裳（十二単） [3].

布を無駄なく使う方法です [2]。なお、着物は、完成して着用したあとでも、各部分に分解して洗い、再び縫い合わせて元の着物に戻すことができます。

直線裁ちの技法で作られたのが、五衣唐衣裳（いつつぎぬからぎぬも）とよばれる、平安時代の貴族女性の衣装です。現代では、十二単（じゅうにひとえ）という通称でよばれることが多いです。図 3 は、五衣唐衣裳（十二単）の例です。現代でも、天皇家の行事では、このような衣装が用いられます。

「五衣唐衣裳」という言葉は、「五衣（いつつぎぬ）」「唐衣（からぎぬ）」「裳（も）」という、衣装の各部分を合わせた名称です。「唐衣」は上半身、「裳」は下半身の後ろ側につける上着です。唐衣の下には、何枚も衣装を重ね着していますが、その中で桂（うちぎ）を 5 枚重ねるようになったことから「五衣」という名称が生まれました。

直線裁ちで作られた衣装を重ね着した結果、写真を見てわかるように、襟や袖口など衣装の縁に、重ねた衣装が層になって見えます。そこで、この層の色の並びを、季節や場面にあわせて美しく彩ることが探求され、それが「かさねの色目」として伝えられてきました。

なお、時代がくだり、より実用的な衣装が主流になるにつれ、当初は五衣唐衣裳の下に肌着として用いられた「小袖（こそで）」が、やがて上着となっていき、これが現代の「着物」の原型になりました。「小袖」という名は、袖口の開きが狭いことからついた名です。

平安時代の色彩が、なぜ再現できるのか？

ところで、平安時代に使われていた色彩が、なぜ現代に再現できるのでしょうか？ 1000 年前の繊維材料で、現代に残っているものはありますし、奈良の正倉院には、1250 年前、奈良の大仏が建てられた頃の布が、いまでも保管されています。しかし、長い年月の間には色に変化してしまうため、それを見ても、当時の色彩はわかりません。

現代では、カラーディスプレイのように、いくつかの基本色を自由な割合で混ぜ合わせ、さまざまな色を作り出すことができます。しかし、長い間、色は、自然にある植物や鉱物を材料として、色素を抽出することで作られていました。そのため、作ることができる色は、その材料に依存していました。

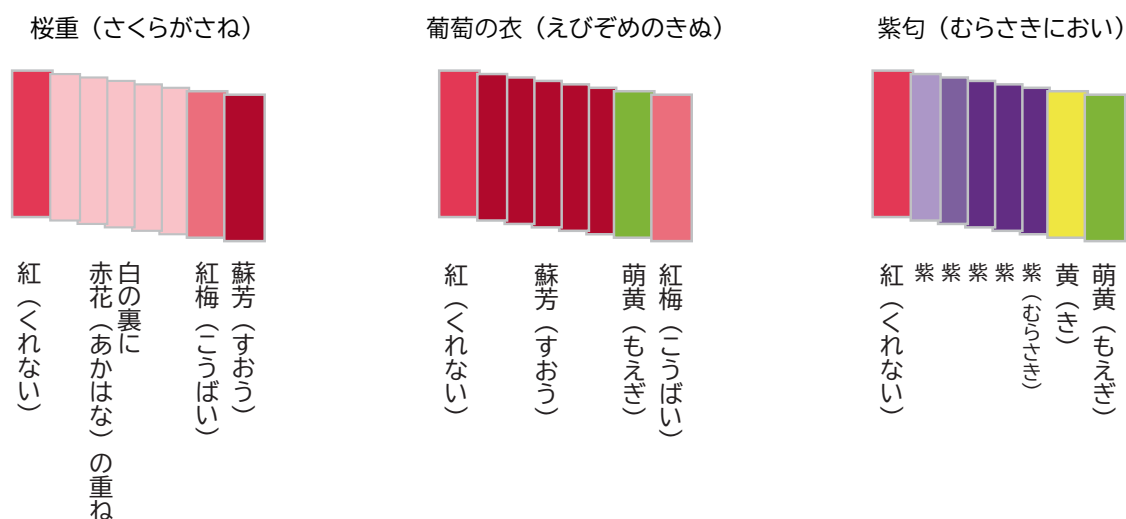


図 4: 春の「襲の色目」の例。それぞれ、右側が外（表）に着的衣服，左側が内側の衣服の色を示す。

しかし、このことは、はるか昔に作られた色であっても、どのような材料で、どのような工程で作られたのかがわかれば、その色を再現できることを示しています。例えば、平安時代の宮廷の規則集である「延喜式 (えんぎしき)」には、衣装の色についての規則があり、その色を作るための材料と工程が詳細に記されています。もっとも、当時と同じ材料が手に入るわけではないので、現代に再現される色はあくまで推定ですが、さまざまな研究によって、1000 年前の色を再現する試みが行われています。

かさねの色目

さて、「かさねの色目」の話に戻ります。平安時代の衣装での、層状に重なった衣装の配色を「かさねの色目」とよんでいます。しかし、「かさね」には「襲」「重」の2通りの字が用いられます。「襲」は、図3について説明したように、色の並びによる配色をいいます。一方、「重」は、濃い色と薄い色の絹を重ねて、濃い色が薄い色を通して透けて見えるときの色合いをさします。

「かさねの色目」は、さまざまなものが試されるうちに、「定番」の色目には名前がついて、後世に伝えられていきました。そして、さまざまな儀式といった「場面」、春夏秋冬の「季節」、さらに着る人の年齢によって、それらにあった色目を使うことが、洗練されたふるまいとされました。

文献 [4] には、いくつかの文献に記録されている、各季節の「襲の色目」が紹介されています。ここでは、「春」の色目のうちいくつかを、図4に掲載します。これらは、1480年頃に古典学者の一条兼良によって記された「女官飾抄」[5]に掲載されているものです。春というと、現代でいうピンク系統の色が思い浮かびますが、それ以外にも、春の若葉を示す萌黄 (もえぎ) 色や、紫のグラデーションなど、さまざまな配色があることがわかります。

演習問題

参考文献 [6] のウェブサイト（講義のウェブページにリンクがあります）では、各季節の「重ね」の色目が紹介されています。そこにある「春」の色目について、(1) 自分のもつ「春」の印象と一番合っている色目、(2) 自分のもつ「春」の印象と一番かけ離れている色目をそれぞれ選び、その理由を述べてください。

*

参考文献

- [1] イラストボックス <https://www.illustration-box.jp> 提供のイラスト。
- [2] 京都・山本呉服店のサイトに、裁断のしかたが図解されています。
<https://y-yukiko.jp/archives/2758>
- [3] 第10回 武市昌子杯 振袖・留袖・花嫁着付技術選手権 エキジビションにて、TCC00313 - 投稿者自身による作品, CC 表示-継承 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=53972024>
- [4] 和の色のものがたり 季節と暮らす 365 色, 視覚デザイン研究所 (2014), pp. 32-33.
- [5] 一条兼良, 女官飾抄, あきの屋金楽による写本 (1821), 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539054>
- [6] 有職の「かさね色目」, 綺陽装束研究所 <http://www.kariginu.jp/>